

アメリカにおけるリュミエール映画の受容および排除 —シネマトグラフの世界的浸透〈その3〉—

永治 日出雄

Hideo NAGAYA

(ヨーロッパ文化選修)

I アメリカにおける映画の発祥

南北戦争が終結した1865年、フランスの歴史学者エドゥアール・ド・ラブレールは、独立戦争以来の米仏友好を慶賀し、アメリカになんらかの記念物を贈るよう提言した。この提案を受けて両国の間に連合協議会が設置され、ニューヨーク港入口のペドロ島に自由のシンボルを建立する構想が進められた。こうしてアルザスの若手彫刻家フレデリック・バルトルディが〈自由の女神像〉を製作し、やがてパリの象徴を造営する建築家ギュスターヴ・エッフェル、歌劇『ファウスト』の作曲者シャルル・グノーなども協力する。300隻の随行船を従えたクリューランド大統領臨席のもとに、大彫像の序幕式が1886年10月28日に挙行された。⁽¹⁾

18世紀末葉のアメリカでは産業の主体が都会の中心に移り、農村部からの労働者とともにドイツ、イタリア、アイルランド等の移民が都市の構造を肥大化させていた。最初の摩天楼、10階建てのオーディトリウム・ビルが1889年にシカゴで造営され、翌年26階建てのワールド・ビルがニューヨークで完成した。1888年に市街電車の第1号がヴァージニア州の首都リッチモンドに登場し、1895年にはアメリカ全土での操業が851路線にも及んだ。⁽²⁾

こうした都市の民衆は11時間以上の仕事に日々追われ、過密で劣悪な生活環境にも苦しんだ。1893年には金融恐慌によって1万5千の会社が閉鎖し、大衆デモとストライキが合衆国全土に波及する。しかし、生産性の向上や労働運動の発展に伴って、消費生活やレジャー活動に対する民衆の欲求も強まっていく。1879年にフランク・ウールワースのチェイン・ストアが創設され、1883年にはプロ野球二大リーグの対抗試合が開始された。労働者層にとって無二の楽しみは、フェニアス・バーカスの大曲芸団、コニーアイランドのような遊園地、続きもののヴォードヴィル・ショウなどに出かけることであった。大衆的な新聞や雑誌も飛躍的に伸長し、1892年ニューヨークでは日刊紙『ワールド』が37万部、月刊誌『レディズ・ホーム・ジャーナル』が70万部を誇った。⁽³⁾

1878年にカリフォルニアの写真家エドワード・マイブリッジは、12台のカメラを並列に配置し、疾走する馬の連続写真12枚を撮影した。この連続写真は地元の新新聞『カリフォルニア田園新報』で称賛を受け、まもなくフランスの科学雑誌『ラ・ナチュール』に掲載される。1881年パリでマイブリッジは、運動再現の装置ゾージュロスコープを披露し、1889年のパリ万国博覧会にも出品した。マイブリッジの撮影はフランスの高名な実験生理学者エティエンヌ・マレイを大いに啓発し、クロノフォトグラフ(連続写真撮影装置)の発明へと導いた。⁽⁴⁾

マイブリッジは1888年にニュージャージーを訪れ、ウェスト・オレンジ研究所でトマス・A・エディソンと会見した。この際にエディソンは自己の蓄音機とマイブリッジの連続写真を結合する着想を示したらしい。そうした器械の開発をエディソンは同研究所の助手ウィリアム・K・L・ディクソンに指令し、1893年に映写機キネトスコープの特許を取得した。この考案は50フィートの带状フィルムと電気モーターを備え、覗き眼鏡で動く映像を眺めるものである。エディソン自身よりもおそらく助手ディクソンによって達成されたキネトスコープは、同年シカゴの万国博覧会で披露された。1894年4月14日ブロードウェイ1155番地に数台のキネトスコープを配備したエディソン・パーラーが開業し、同じような店舗がワシントン、サンフランシスコ、ロンドン、パリ、等々で1896年まで人気を集めた。⁽⁵⁾

ヨーロッパでは1895年3月からリュミエール一家によって数次の試写会が催され、グラン・カフェでの興行開始がシネマトグラフの真価を広く認識させることとなった。スクリーンへの投射に消極的であったエディソンは、キネトスコープ販売の限界を悟り、1896年初めには「最新の驚異的な発明」、ヴァイタスコップ・エディソンの製作を公言した。このプロジェクター式映写機はワシントン在住の青年トマス・アーマットによって開発されたものであり、エディソンはその特許権と販売権を密かに買い取ったにすぎない。⁽⁶⁾テリール・ラムゼイの古典的著作『百万一夜——映画の歴

史』にはアーマツ自身のエディソン宛同年3月5日付書翰が収録され、ヴァイタスコープをめぐる取引と密約が赤裸々に語られる。

キネトスコープや蓄音機を扱う業者は、キネトスコープの画像をスクリーンかキャンバスに投射できるエディソンの器械が完成することを、この一年見守り、待望しています。ほかの者によっていかに優れた器械が発明され、その成果がいかに満ち足りて優越したものであっても、こうした事業に係りをもち、投資も考えている人々の大半は、エディソンの器械を待ち続けて、他のなにものにも満足せず、エディソンの成就を確かめるまで動かないのです。最近の数ヵ月彼らの多くがその種の器械に投資するよう勧められたものの、ほかの機器を忘れさせる機器がエディソンによってすぐにも完成され、製作されると確信し、出資を躊躇しているのです。

このような事情なので、容易にあなたも私たちと同じ結論に到達されるでしょう。すなわち、最少の時間で最大の利益を確保するため、卓越した才能で知られるエディソン氏の名前を、新しい器械に付けることが必要なのです。この器械の発明者に祀りあげられるのを望まないとしても、可能なかぎり最良の成果を得るため、エディソン氏とその工場の名を使用できるよう、協議することは可能と思われます。勿論いかなる調査に対しても事実を偽って報告してはなりません。真実を歪めずに、これまでの名声に助けられる形で、エディソン氏の名前を使用できると考えます。一定の個所に〈アーマツ設計〉などの文字を刻んで、この器械を製作することが、可能かもしれません。それぞれの縄張を固め、商売を軌道に乗せ、各々の利益を収穫したあとは、この器械に発明者としてあなたの名前を刻むことが、私たちの取引となります。そして、新発明への栄誉が結局はあなたに授けられることを疑いません。私たちはこうした話し合いをひとつのビジネスとみなし、あなたも同じ見地から充分諒解されているものと考えております。⁽⁷⁾

1896年4月3日エディソンはウェスト・オレンジ研究所に新聞記者を招いてヴァイタスコープの試写会を開いた。やがてブロードウェイ屈指のミュージックホール、コスター・アンド・バイアルズ劇場で最初の一般公開が行われる。1896年4月20日からの同劇場プログラムによれば、ロシア人オルチャンスキーの芝居、ポリネッティとピーコの曲芸、フランス人デュクリュー＝ジェラルデック夫妻の二重奏などバラエティ・ショー8本を行ったあと、「トーマス・A・エディソンによる最新の驚異、ヴァイタスコープ」が披露される。この予定は映写機器を取付ける準備のため数日

遅れ、4月23日に初めて新発明が公開された。ワシントンから出向いたアルマツの指示によってヴィスタスコープが2階席に設置され、エディソンは映写ボックスに入った。プログラムには『海の波』をはじめ12点の作品が記載されていたが、当日は踊り子アナベルの『スカート・ダンス』など6点が、幅12フィートの大スクリーンに上映される。⁽⁸⁾翌日発行の『ニューヨーク・タイムズ』はブロードウェイ34番街コスター・アンド・バイアルズ劇場での初公開をつぎのように報道した。

昨夜その会堂がまっ暗にされると、ボックスから軌の音が響き、スクリーンへ異常な閃光が投ぜられた。バラエティ・ショーに出る金髪の可愛い娘たちがピンクとブルーの衣装で現れ、いとも流麗に日傘で踊った。どの動作もはっきり映っている。彼女らが消えると、怒濤が石の埠頭と砂地の浜に砕け、観客を驚かせた。〔中略〕背の高い痩せた役者と背の低い肥えた役者によるボクシングの茶番劇、『モンロー主義』と題する寓意的なコメディ、ホイツの道化芝居『ミルク・ホワイトの旗』が幾度も繰り返され、長身の金髪女性によるスケート・ダンスが掉尾を飾った。これらすべては驚異的なまでに真実味を帯び、並外れて愉快なものであった。⁽⁹⁾

また、翌月5日付『ニューヨーク・ヘラルド』の挿絵には、ヴィスタスコープを扱う技術者ふたりと、スクリーンを見詰める観衆が描かれている。こうして1896年4月下旬にはアメリカ人の手で投射式映写機が創出され、ブロードウェイの中心地ヘラルド・スクエアで人々を驚嘆させていた。⁽¹⁰⁾

II アメリカにおけるリュミエール映画の受容

アメリカにおけるシネマトグラフの初公開は、1896年6月にリュミエール映写技師団の幹部フェリックス・メスギッシュによって行なわれた。1933年に刊行した著書『世界映写旅行』のなかで、彼はフランスやアメリカでの興行に止まらず、ロシア、エジプト、インド、等々への巡業に関しても詳しく述べている。最初にこの貴重な証言を手掛りとして、シネマトグラフの新大陸進出を跡づけてみよう。

回顧録『世界映写旅行』によれば、1896年1月5日にメスギッシュはリヨン＝モンプレジールのリュミエール社実験室を初めて訪れた。アルジェ生まれの彼は、軍人としてアルル第3連隊に配属され、電気や写真の技術については無知であった。だが、映写技師団の編成に着手したルイ・リュミエールの懇請によって、メスギッシュは数日後にフランス陸軍から除隊し、実験室でシネマトグラフの機能や操作を学び始める。⁽¹¹⁾

1895年12月28日パリ＝キャプシーヌ大通りで歴史的

な初公開が行なわれたあと、地元リヨンではシネマトグラフの披露が翌年1月25日から共和国街1番地において開始された。市庁舎とオペラ座に近いこの会場ではリュミエール社の受託人ペリゴーが興行を主催し、映写の責任者フェリシアン・トレウェをユジュー・プロミオとメスギッシュが補佐する。シネマトグラフの巡業がフランス各地に広がるにつれて、メスギッシュも主としてリヨン北方のマコンやシャンパーニュ地方のシャロン・シュル・ソーヌで映写を担当した。⁽¹²⁾こうした国内巡業がまもなくリュミエール映写技師団の大陸進出へと飛翔する。

さらに素晴らしいことになった。つぎのような電報を受け取ったからである。「近日ニューヨークに出発すべく、ただちにリヨンに帰還されよ！(リュミエール)」私は狂喜した。

リヨンに戻り、工場のなかを歩いた。全員が仕事の熱気に煽られていた。国内にも国外にも営業の拠点をつぎつぎと拡大し、増設しつつある。プロミオに社主から大幅な自由を与えられ、ヨーロッパのさまざまな大都市で各々特有の情景を撮影する任務が課せられた。同時にモンプレジールではたえず映写技師の養成が進められる。そして、技術を習得するや、器械を携えて世界の隅々へ行くよう指令された。ある人たちは喧騒で知られるマルセイユっ子を啞然とさせ、ほかの人たちはボルドーやナンシーで営業した。イギリスやドイツやイタリアに向いた人たちもいる。私に特定されたのはニューヨークである。英語を知っているから、アメリカに遠征せよ、と命ぜられる。すべて簡単に決まった。〔中略〕

6月上旬私はルアーヴルから大西洋横断定期船ブルゴーニュ号に乗り込んだ。貴重な器械を旅行鞆に収め、用心を怠らない。以後この財宝を身辺から離すことはなかった。

ニューヨークに着くと、所持する器械を税関に申告する必要がある。だが、こうした申告について厳密な指示を受けており、それを固く守るほかない。細部に至るまで私は譲らなかつた。この問題が重大な結果、アメリカにおけるシネマトグラフ・リュミエールの存否そのものに係ることを、のちに読者は知るであろう。実際アメリカに到着したいかなる映写技師にも、みずからの機材を〈個人的な作業の器具〉として扱うと、申告書に署名するよう求められた。輸入税は免除されることになった。⁽¹³⁾

アメリカに入国したメスギッシュがただちに直行したのは、マンハッタン島南部のブロードウェイ大通りである。この目抜き道路は1624年のオランダ人上陸に起源を發し、1735年には7つの劇場がその周辺に存在した。演劇史上重要なジョンストリート劇場は1867年に、

フランス・ロマンテック・ドラマで名高いユニオン・スクエア劇場は1872年に開場し、初期のマディソン・スクエア・ガーデンも1879年からスポーツや娯楽の殿堂として賑いを見せる。ニューヨーク市民の悲願であったメトロポリタン歌劇場は1880年に落成し、オスカー・ハマスタインによって1892年ヘラルド・スクエアにニュー・ミュージック・ホールが建造された。⁽¹⁴⁾メスギッシュが歩を踏み入れる数日前に、この地でヴァイタスコープ・エディソンが開業されたことはすでに述べた。

上陸した棧橋で私は、リュミエール社受託人ハード氏の代理としてW・アレン氏に迎えられた。この新発明を合衆国で普及させる構想について、氏は同乗した馬車のなかで説明してくれた。ふたりはただちに意気投合した。アメリカの公衆がシネマトグラフを見たいとばかりに望んでいるかを、アレン氏は語った。

話に夢中になっていたもので、市街の喧騒をぼんやりと聞いていた。沢山の大通りや街路を経て、ニューヨークの中心、首都のもっとも繁華な地区を走る。停車した！29—30丁目であった。エレベーター係の黒人が10階の〈シネマトグラフ・リュミエール営業所〉まで案内してくれた。ニューヨークのミュージック・ホール、すなわちマディソン広場のコスター・アンド・バイアルズ劇場で公演が終わると、ただちに私は映写を試みた。私の金属性ボックスが2階席の中央にあり、電線は可変抵抗器の端子に接続している。巨大なスクリーン、これまで見たこともないほど堂々としたスクリーンが、舞台のうえで繰り降されたり、巻き上げたりされる。それに画面がびったり入るよう、レンズを調整する必要があった。

当地の名士やマネージャーやオーケストラの指揮者の前で幕開きの出しものを繰り上げた。職業柄容易には感心しないお歴々も、これには驚愕し、驚嘆した。

その翌日、6月18日に私はアメリカの公衆と直接に接触した。観衆がどれほど熱狂したを理解するには、拍手喝采に揺れる映写会場に身を置き、集団的な興奮の瞬間を体験することが必要である。始動のスイッチで数千の観客を私は闇に沈める。各々の映像が嵐のような拍手とともに通り過ぎる。6本目の作品が終わると、私が会場の照明をつけた。観衆は湧き立っている。「リュミエール兄弟！リュミエール兄弟！」と叫ぶ歓声。そして、ブラヴォーの声が鋭い口笛に混じる。よく知られているとおり、アメリカ人が満足の意を表す仕方である。熱烈な歓呼！生涯忘れえぬ情景！〔中略〕

最初の公演に授けられた拍手喝采にボックスの私は陶醉したが、退去するまえに映写フィルムを

巻き直すしていると、劇場の支配人が扉を叩いた。開けてみる。すると一言も発しないうちに、頑丈な男たちが私の身を押し、力づくで連れだす。そして、勝ち誇るかのように、私を舞台のうえに上げて、公衆に紹介した。オーケストラが「ラ・マルセイユーズ」を演奏する。私が逃れないよう、支配人も私の手を掴んでいた。⁽¹⁵⁾

こうしてリュミエール映画の初公開が終了すると、劇場の総支配人はメスギッシュを晩餐に招き、シャンパンでその一夕を慶賀した。当地の有力新聞も驚異的なシネマトグラフについて報道し、メスギッシュの仮住まい、23丁目の〈ブフ・アラモード〉にもたえず報道陣が詰めかけた。以後彼はアメリカ東部の各地やカナダのトロントでも出張する。『世界映写旅行』の記述をなおしばらく続けたい。⁽¹⁶⁾

この国ではエディソンのキネトスコープ、覗いてひとりで見えるものしか存在しないからである。原始的な方式では公衆にスペクタクルを供することなど思いもよらない。実際それはスペクタクルではなく、たんなる娯楽である。たったひとり人間が動く映像を箱形の器械のなかに見る。拡大レンズがその運動を再現するが、投射するわけではない。新しい世代があまりにも無知である歴史的な局面を明確にするため、私は断言しよう。この時点で活動写真を映し出すスクリーンは合衆国にひとつも存在しなかった、と。こうしてリュミエール・シネマトグラフがキネトスコープに急速にとって代わった。〔中略〕

つぎの数週間私はユニオン・スクエアのキースズ劇場、ブルックリンのブラック・アメリカ劇場、58番街のプロクターズ・プレジャー・パレスで映写装置をした。思いがけずパレスへリュミエール工場の主任映写技師プロミオが訪ねてきた。映写が終了したところで、彼は微笑しながら言った。「監督に来ましたよ！」

すぐに私の待遇が改善された。いまや日に6ドルの収入となった！実際にそうした生活は心身を著しく消耗させる。撮影と演出と映写のひとり三役を兼ねていた。

昼間は題材を求めて市街に行き、地域的な特色のある光景を撮した。働く人や散歩する人の日常的な姿を捉えることが楽しかった。彼らは無償の俳優であって、肩を張り合うこともなく、私の作品を自然らしさで仕上げてくれた。

こうした営みが夜の勤務の妨げとならないのは、ニューヨークと地方都市の間を鉄道で往復するからである。

ワシントンのウィラール・ホール、フィラデルフィア、バルティモアのある教会、シカゴなどでさらに私は映写装置を施した。セントルイスまで

も赴いた。どこでもが熱狂的な歓迎され、どの会場の正面にもシネマトグラフ・リュミエールという文字が燦然と輝いていた。⁽¹⁷⁾

アメリカにおけるシネマトグラフ初公開は、メスギッシュ著『世界映写旅行』のなかで以上のように記述されている。映画史家ジョルジュ・サドゥールはこの貴重な記録に依據しながらも、初公開の月日と会場について誤りがあるとし、『世界映画全史』への引用にあたって問題の箇所を削除している。⁽¹⁸⁾サドゥールによれば、ニューヨークでシネマトグラフが初めて披露されたのは、上記の引用文中にみられる6月18日ではなく、同じ月の29日であった。また、メスギッシュが実際に映写した会場も、ヴァイタスコープを公演中のコスター・アンド・バイアルズ劇場ではなく、そこから半キロほど離れたキースズ・ユニオン・スクエア劇場と思われる。17丁目ユニオン・スクエアに面するこの劇場は、ゼネラル・エレクトリックの傘下に属し、キースズ・ミュージック・ホール系列のひとつであった。なお、精細な『比較映画史』の共著者ジャック・デランドとジャック・リシャールは『世界映写旅行』の記述についてさらに厳しく、正確な史料として採択するには粗雑すぎると断言する。⁽¹⁹⁾『比較映画史』に記載される第一の反証は、キースズ・ユニオン・スクエア劇場でのシネマトグラフ披露を告知する6月28日付日刊紙『ニューヨーク・ヘラルド』である。

数ヵ月の折衝を経て、M. B. F. キースズは謹んでつぎのように公示する。

シネマトグラフ上映

明日1時30分、4時30分、9時30分より。

プログラム

列車の到着

水を撒かれた庭師

ロンドン市街におけるアラブ人歌手

第96歩兵連隊

ハイド・パークの騎兵隊

滝 (ジュネーヴ博覧会より)⁽²⁰⁾

なお、キースズ・ユニオン・スクエア劇場では一般公開に先立って6月28日に報道関係者を招き、シネマトグラフの試写会が催された。スクリーンの準備が間に合わず、シーツを払げて映写したと伝えられる。⁽²¹⁾同劇場におけるこうした試写会と一般公開について、演劇週刊誌『ニューヨーク・ドラマティック・ミラー』につぎのような記事が見出される。

キースズ・ユニオン・スクエア劇場で今週話題のシネマトグラフ・リュミエールについて、6月28日土曜日に特別のマチネが催され、参集した多数のジャーナリストのまえで数本のフィルムが試写された。これらのなかにはとくに躍動的な作品もあり、平素驚かぬジャーナリストたちも、魅了されて拍手喝采した。

シネマトグラフはヴィスタコープやエイドロスコープと軌を一にしているものの、映像がより鮮明であり、揺れも少ない。したがって、別種の機器で製作されたようにこれらの画像は眼に映じる。

最初のフィルムは『海中への飛込み』である。ここでは脚の長い若者が、跳躍台を駆け登って、海のなかに飛込み、岸辺が波に洗われる。〔中略〕

最良のフィルムは『列車の到着』であった。列車が駅に着き、乗客が降りて、友人を見つける。〔『ニューヨーク・ドラマティック・ミラー』1896年7月4日号〕⁽²²⁾

先週ここではシネマトグラフ・リュミエールが多量のセンセーションを巻き起した。〔中略〕観衆はこの新発明に熱狂した。轟進する特急列車が到着する駅の映像、およびフランス軽騎兵が突撃する映像は、熱狂的な喝采を博し、どのフィルムもそれぞれ成功を収めた。新たにひとつのフィルムが供せられ、そこにはフランス＝リヨンのリュミエール工場で正午に人々が退出する様子を映し出す。〔『ニューヨーク・ドラマティック・ミラー』1896年7月11日号〕⁽²³⁾

シネマトグラフは画面の鮮明さや映像の迫力においてヴァイタスコープを明らかに凌駕し、いたるところでアメリカの観衆を魅了した。つぎに掲げるロチェスターの日刊紙『ポスト・エクスプレス』は、翌年の2月においてもリュミエール映画の人氣がなお衰えぬことを語っている。

当地のアトラクションとしてながく大当たりを続けているシネマトグラフ・リュミエールは、来週からワンダーランド劇場で継続の第15週に入る。家庭生活の情景が今度の映写によって一層細部まで判ると期待して、初めて観る人もすでに観た人もやって来る。たとえば〈嬰兒の食事〉は先週も今週も上映される。そこでは幼い家族に優しく食事をさせる父と母が映し出される。大抵の観客は食卓に向かう幸福な三人に眼を奪われ、見事な背景として樹木や茂みが活かされていること、また微風によって木の葉が揺れていることに気づかない。ほかの作品すべてについても同じように考えられる。それらは興味深い多くの細部を包含しており、同じ作品を幾度も観ながら、ひとつひとつを発見していく。⁽²⁴⁾

このようにメスギッシュ自身による著書『世界映画旅行』と当時の新聞・雑誌に掲載された記事を照合するとき、リュミエール映画への強い関心や高い評価など、共通する記述を確認しつつ、いくつかの重要な差違に私たちは当惑せざるをえない。シネマトグラフ初公開の月日と会場、コスター・アンド・バイアルズ劇場およびキーズ・ユニオン・スクエア劇場との係

り、アメリカにおける投射式映写機の有無など、信憑性を問われる個所が、メスギッシュの回想にはかなり見出される。また、たんなる記憶の誤りによってではなく、エディソン等への対抗を意識するあまり、事実と異なる記述を遺したとも考えられる。しかし、アメリカでのシネマトグラフ公開について現在まで集積された史料はあまりにも僅少である。問題を含みながらも、そうした史料のなかでメスギッシュの回顧録はもっとも詳細で迫力に富む。なかでも1896年秋からの熾烈な係争と新大陸におけるリュミエール映画の運命を追究することは、この貴重な記録を閲せずにはきわめて困難である。

III アメリカにおけるリュミエール映画の排除

1873年の金融恐慌を転機としてアメリカの経済界では独占体の形成が始まった。当初は価格の協定や市場の分割を図る〈紳士協定〉が同業者の間で結ばれ、1879年にはジョン・ロックフェラーによって最初のトラスト、スタンダード・オイルが組織された。ジョン・P・モルガンも鉄道への投資や銀行への支配によって金融王国を築く。モルガン財閥の支援を受けてエディソン照明会社も設立され、ロウアー・マンハッタンに発電所が建設された。1882年9月4日財閥の当主立会いのもとにエディソンは初めてスイッチを点じ、ニューヨーク証券取引所、ニューヨーク・タイムズ社、ニューヨーク・ヘラルド社、さらにはモルガン邸が白熱灯に輝いた。この電気産業はやがて巨大なゼネラル・エレクトリック社へと発展する。⁽²⁵⁾

1893年に南西部の採掘業者ノーマン・C・ラフはエディソンに助言してキネトスコープ社を設立した。同社の主要な目的は世界最初の撮影所ブラック・マライアをニュージャージーに建設するとともに、国内および海外の市場から同業者を排除するところにあった。また、1895年2月にエディソンと袂別したディクソンは、アメリカン・ミュートスコープ社を組織し、新たにアルバム式の映写機を製造する。また彼は投射式のバイオグラフをも開発し、1896年9月14日ピッツバーグのアルヴィン劇場で一般に披露する。この会社は2百万ドルの資本金に支えられ、ウォール街の実力者や共和党の有力政治家との繋がりをもっていた。キネトスコープ社とミュートスコープ社は映写機や映画作品の販売でたがいに競合するが、権力や法律の援護を受けてアメリカから外国企業を締め出す姿勢では一致していた。⁽²⁶⁾メスギッシュがシネマトグラフへの攻撃に直面するのは、カナダへの巡業を終えた直後である。

1896年11月ニューヨークに戻ると、大きな変化をまのあたりに見た。私たちの営業所は30丁目東13番地に移され、受託人ハード氏が姿を消し、ウィリアム・フリーマン氏が興行主となった。

そのうえ新しいマネージャーとしてラフォン氏が1896年1月に到着することになったが、不幸にも彼は英語を知らず、本国におけるアメリカ人の心性も精神状態も解しなかった。

ついに競争が開始された。ニューヨークの主要道路のひとつ、ブロードウェイの盛り場に簡潔な電光掲示がつぎのように現われた。

アメリカのバイオグラフ！

アメリカ人のためのアメリカ！

この方策を知って私の心は深く沈んだ。

民族意識の〈目覚め〉、合衆国では珍しくない排外主義を私たちは受け身で見守るばかりであった。バイオグラフ、バイオスコープ、キネトグラフが興味を惹くプログラムを携えてつぎつぎと登場する。彼らは巨大な宣伝を武器として、私たちに戦闘を開始した。⁽²⁷⁾

「アメリカ人のためのアメリカ！」というナショナリズムは、つとにイギリスに対する独立戦争の時代より始まり、植民地支配を打破する動きと結びついてきた。『独立宣言』の起草者トーマス・ジェファソンもイギリスに対抗する強硬な保護政策に傾き、1789年に最初の関税法が制定された。こうした輸入制限は毛織物、鉄製品、食品など国内産業の発展を促進し、19世紀後半にはトラストやカルテルの形成をも助長することとなった。なかでも1890年に成立したいわゆるマッキンレー法は、関税率の引上げ、課税品目の増大、外国製品へ規制強化によってアメリカの保護貿易政策を格段に強化した。⁽²⁸⁾

メスギッシュが渡米した1896年の秋、合衆国全土は大統領選挙で沸騰していた。36歳の若さで民主党候補に選ばれたW・J・ブライアンは、保護関税とトラストを厳しく批判し、銀貨の自由鑄造と所得税の引上げを主張する。彼の烈々たる弁論と精力的な活動は、人民党との連携もあいまって農民層や労働者層に支持を挙げた。他方金本位制度と保護貿易を標榜する共和党は、1890年の関税法改正で陣頭に立った下院議員ウィリアム・マッキンレーを大統領候補に推し、実業界・金融界の全面的な支援を受けた。⁽²⁹⁾

大統領候補の実弟アブナー・マッキンレーは、ディクソンの招きに応じてミュートスコープ社重役の地位にあり、空前の選挙資金を投入する共和党はバイオグラフの宣伝効果にもいち早く着目した。ディクソンはピッツバーグでの初演に続けて、1896年10月12日からニューヨークの大劇場ハマスタイン・オリンピックでバイオグラフの興行を開始した。ここではディクソン撮影による『1時間に60マイル、エンパイア・ステート特急』など7本の作品が供せられ、さらに共和党候補マッキンレーの映像が2本公開された。⁽³⁰⁾同劇場におけるバイオグラフの上映と政治的な宣伝効果については、10月24日発行の『ニューヨーク・ドラマテック・

ミラー』に注目すべき記事が見出される。

「光と運動を発生させる〈最新の〉技術」とプログラムに記されたバイオグラフが、初めて披露され、大成功を収めた。その映像は非常に大きく、きわめて鮮明で揺れもない。提供されたフィルムは『家畜小屋の火事』、『ナイヤガアの激流』、『中略』、『1時間に60マイル、エンパイア・ステート特急』、『オハイオ州におけるマッキンレーとホバードのパレード』、『自宅で寛ろぐ御大マッキンレー氏』などである。最後の作品では芝生を散歩するマッキンレー氏が、秘書から電報を渡され、それを読み取る姿が映し出される。

月曜の夕には著名な共和党員が多数参加され、副大統領候補ガーレット・ホバード、マット・ケイとその子息ディック、J・H・マンレー、マック・オスボーン、C・N・ブリス、パウエル・クレイトン、ホラス・ポーター將軍などお歴々もおられた。会場は立錐の余地もなく、マッキンレー氏の映像が観客を熱狂させた。劇場では滅多に見られぬ熱狂を呼び起した。劇場ではこのような示威運動をほとんど見たことがない。全員総立ちとなって、観客は拍手喝采し、アメリカの国旗を振った。そして、つぎの番組を始めるため、会場を静めるのに数分が必要であった。⁽³¹⁾

こうして保守・革新の両陣営に国論が分裂し、壮絶な選挙戦が展開されたあと、マッキンレーが710万2千票＝271選挙人を獲得して凱歌を挙げ、ブライアンの成果は649万3千票＝176選挙人に止まった。⁽³²⁾共和党候補が勝利したあと、外国人や外国製品に対する規制もさらに強化され、メスギッシュはつぎのような事実を体験する。

1897年1月の日曜日に大雪が降ったので、マネージャーに伴われてセントラル・パークに行く。優美な若人たちが豪華な櫓で縦列に進んでいた。私たちの後に幾人か続き、ほとんどがわが社の者だったため、雪合戦を演出しようと、即座に私は考えた。面白く思っただけの人にもそれに加わり、その大熱戦を撮影していると、ひとりの警官が介入し、彼の鞆に私のカメラを入れるよう命じた。取調べの理由は〈公園〉で写真を撮るには特別の許可が必要であること——そのような注意は聞いたことがなかった——、集会は一切禁止されており、ここで思いついた楽しみが禁止条項にふれたことである。

抗議したにもかかわらず、警官は私を管轄の警察署長のもとへ連行すると言う。ラフォンも体を張って抵抗するものの、当然ながらフランス語で話し、上手に説明できない。ジェスチャーを繰り返す、身分証明書を見せ、罵声も発したが、私と一緒に警察署に来る破目になった。ふたりは午後

までそこにいた。夕刻遅く大使館事務局から電報が届き、ようやく釈放が決定された。⁽³³⁾

1897年3月4日マッキンレーは大統領に就任し、関税および歳入に関する臨時議會を招集した。ディングレイを委員長として歳入委員会が集中的な審議を進め、早くも3月30日に下院で採択されたあと、7月24日に新しい関税法が成立する。このいわゆるディングレイ法は、羊毛関税の復活など1890年の関税法を可能なかぎり強化し、国内産業を保護するため外国製品に未曾有の高率を導入するものであった。⁽³⁴⁾1897年夏から始まったシネマトグラフに関する取り調べとラフォンへの告訴は、新政権における行政府および立法府の動向に呼応すると思われる。以下『世界映写旅行』のもっとも痛切な部分に入る。

1897年の6月か7月、すなわち私が上陸して1年以上のちに、どんな指示からか判らないが、アメリカの税関が意外な発見をした。

ニューヨーク到着の際に私たち映写技師のひとりが、フランスから携えた機材に関して申告書に署名をした。合衆国で私たちだけが動く映像を見せている間は、税関は気にもしなかったのに、いまやその申告書が法規に反するとの見解を示したのである。私たちの前にアメリカの競争相手が現われたという事実を、このような解釈に無関係と考えることはできない。

過去にまで遡こうした保護主義は法の濫用と思われるが、どの国でも行政権力を無視できる人はいない。行政権力はそれ自体絶対的な権力なのである。

私たちはそれを身にしみて感じた。

ラフォン氏はスタッフの申告書に責任があるとみなされ、関税法違反の罪で告訴された。

私たちの存在をなきものにしようと、画策されたことは明白であった。発明の構想においても公衆への公開においても先鞭をつけたシネマトグラフ・リュミエールが、アメリカの製品に席を譲るよう迫ったわけである。

こうした陰謀のなかでラフォン氏は気力をなくしていた。彼には特許戦争が怖かった。エディソンがリュミエールに拮抗する！

密かに伝えられるところでは、ラフォン氏にまもなく逮捕状が発せられる。身の安全を願った彼は、対処の適否は別として、やむなく逃亡することを決心した。

7月28日ハドソン河口の沖合までボートで彼に同行した。ながく待つ。ついにフランス国旗を掲げた太平洋横断汽船が、〈特命によって〉停泊し、船舶用の梯子が降される。こうしてリュミエール兄弟代理人ラフォン氏は密かに乗船し、フランスに帰った。

私はニューヨークに留まったが、マネージャーの退去によって自分たちの企業に対する追及はさらに厳しくなった。それでも私は25丁目にあるロイヤル・ミュージアムの部署に就き、それが最後の場となった。財産調査のあと巧みに隠した自分の機器のほかは、すべての機材が差し押えられた。以後私は本国に送還される同僚の手助けに専念した。⁽³⁵⁾

ディングレイ法では過去の違反をも問う遡及主義が是認され、リュミエール社の責任者ラフォン氏には逮捕の危険が迫った。1897年7月28日彼は密かに太平洋横断汽船でフランスに帰り、以後司法当局の追及はさらに厳しくなる。25丁目のロイヤル美術館で最後の興行を果したメスギッシュは、弁護士ルビヤールと同行してカナダに避難する。モントリオール、オッタワ、トロントを巡業した彼は、ニューヨークへの帰途ホワイト・マウンテンで虹に映えるナイアガラの瀑布と激流を撮影した。メスギッシュがブロードウェイに別れを告げ、アメリカから全面的に撤退するのは、1897年10月である。⁽³⁶⁾

多事であった17ヵ月ののち、残念にも私は北米巡業を打ち切った。地元のさまざまな機関から集中砲火を浴び、フランス製の動く映像が組織的な敵意に包囲されていた。

あまりにも不利な条件に置かれた戦いであった。一時的に退ぞくほかない。だが、いつの日にか雪辱できる、と私は確信した。

私を乗せた汽船がニューヨークを去った。巨大都市の建造物が天まで達し、私は自由の女神の立像を通り過ぎる。黙り込み、懐疑の念にとらわれてその立像を眺めながら……

一群の摩天楼を彼方に仰ぎ、離れゆく船の上から自由の女神を撮影できる！しかし、なんのために？速度を増しつつ客船は黒煙を吐き、洋々たる波濤のなかに数多くの事象が消え去った。

静穏な8日間が過ぎた。霧のなかにフランスの海岸が現れ、私は無上の喜びを感じた。⁽³⁷⁾

こうしてシネマトグラフは合衆国で大成功を収めたのち、ナショナリズムと保護貿易の荒波を受けて放逐された。しかし、アメリカ経済という潮流自体がさまざまな企業の競争と存亡を経て、独占体の形成と支配へ驀進しつつあった。関税法を根拠に外国の企業リュミエール社を排除してまもなく、アメリカ人によるアメリカの映画産業において凄絶な係争が始まる。一方には共和党政権に係り深いミュートスコープ社、他方にはモルガン財閥に支援されるエディソンがあい対峙し、ほかにも映写器械を扱う多くの企業や業者が存在した。『ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン』の記事が示すとおり、特許権を武器とするエディソンの威圧的な行動によって、1898年2月23日こうした熾烈な

係争の火蓋が切られる。⁽³⁸⁾

動く映像を見せるニューヨークの製造業者や興行業者を相手どって、昨日トーマス・A・エディソンは同市南区裁判所に対し偽造の告訴を行った。〔中略〕

いくつかの会社は昨日召喚令状を受け取っている。

すでに市場に出され、キネトスコープの偽造によってどれほど損害を受けたかを、エディソンは明らかにしたいと望んでいる。すでにキネトスコープは市場に出され、これに対する権利金を支払った者は別として、いかなる器械を映写に使用することも永久に禁止されている。

ただちにつきのような疑問が生れよう。「なぜエディソンはもっとはやく告訴しなかったか？」

現在までエディソンが待っていた理由は判らない。しかし、このような処置によって彼は、競争者の道を遮断できる特許登録をいまや獲得したと、大多数の顧客に確信させた。

エディソン氏はヴィタスコープ、ヴェリスコープ、等々を製造し、使用しているすべての人々を訴追した。活動映写機によって〔リュミエール社製作の〕『キリストの受難』を見せる準備をしている〔演劇プロデューサー〕クロウおよびアーランガーの両氏も、エディソン氏は告訴する意向と思われる。〔中略〕

ヴェリスコープ社の社長ダニエル・A・スチュアートは衝撃を受けたと昨日語った。しばらくまえにエディソンと仲違いした協力者が、同じ種類の新しい器械を見せようと、ライバルであった各社を廻っていたのを、スチュアートは思い起した。すこし経つと同一の人物がエディソンと話しを付けたらしく、キネトスコープの特許を侵害したと自認するよう、ほかの各社に説いて廻った。

ヴェリスコープ社は最近コルベット対フィチモンズの試合を映写し、こうした企画の成功がエディソンを考え込ませたようである。⁽³⁹⁾

【註】

筆者が参照した主要な書物は、本稿において下記の略号で示される。(略号の大文字は著者名の頭文字を、小文字は書名の頭文字を示す。)

- Cl : Bernard CHARDERE, *Les Lumières*, Lausanne, Payot Lausanne, 1985.
 Dhc : Jacques DESLANDES, *Histoire comparée du cinéma*, Tournai-Paris, Casterman, 1966. 2 volumes.
 He : Gordon HENDRICKS, *The Edison Motion Picture Myth*, Berkeley and Los Angeles, University of California Press, 1961.
 Jf : Garth JOWETT, *Film, The Democratic Art*, Boston, Focal Press, 1976.

- Jr : Lewis JACOBS, *The Rise of the American Film*, New York, Teachers' College Press, 1939.
 Mt : Felix MESGUICH, *Tours de manivelle, Souvenirs d'un chasseur d'images*, Paris, Grasset, 1933.
 Ra : Jacques RITTAUD-HUTINET, *Auguste et Louis Lumière, les 1000 premiers films*, Paris, Philippe Sers Editeur, 1990.
 Rc : Jacques RITTAUD-HUTINET, *Le Cinéma des origines, les frères Lumière et leurs opérateurs*, Seysel, Champ Vallon, 1985.
 Rm : Terry RAMSAYE, *A Million and One Nights, A History of the Motion Picture*, New York, Simon and Schuster, 1926.
 Se : Anthony SLIDE, *Early American Cinema*, Metuchen, N. J., Scarecrow Press, 1994.
 Shg : Georges SADOUL, *Histoire générale du cinéma*, Paris, Denoël, 1973. 6 volumes.
 Smb : Paul C. SPEHR, *The Movies Begin, Making Movies in New Jersey 1887-1920*, Newark, N. J., The Newark Museum, 1977.
 Smm : Robert SKLAR, *Movie-Made America, A Cultural History of American Movies*, New York, Vintage, 1994.
 サセ : ジョルジュ・サドゥール著、村山匡一郎ほか訳『世界映画全史』国書刊行会、1993年—1995年。(第5巻まで刊行)
 スエ : R. スクラ著、鈴木主税訳『映画がつくったアメリカ』平凡社、1980年。

- (1) *The New Encyclopaedia Britannica*, Chicago, Helen Hemingway Benton, 1974. Volume IX, pp.536-537.
 (2) *Smm*, pp.3-4. (スエ, pp.13-14.)
 サムエル・モリソン著、西川正身翻訳監修『アメリカの歴史2——1815年—1900年』集英社, pp.528-531.
 野村達朗著『フロンティアと摩天楼——新書アメリカ合衆国史②』講談社, 1989年. pp.67-68, 74-77, 84-86.
 (3) *Jf*, pp.15-17. *Smm*, pp.4-5. (スエ, pp.14-15.)
 野村達朗著, 前掲. pp.88-90, 94-94.
 (4) *Ra*, pp.36-42. *Shg*, tome I, pp.62-70.
 (サセ, 第1巻. pp.184-193)
 (5) *Smb*, pp.17-20. *He*, pp.68-74. *Smm*, pp.9-13. (スエ, pp.19-23.)
 R・W・クラーク著、小林三二訳『エジソンの生涯』東京図書, 1980年. pp.198-205.
 (6) *Ra*, pp.192-199, 218-225. *Shg*, tome I, pp.303-308. (サセ, 第2巻. pp.121-124.)
 (7) Armat's letter of March 5, 1896. in *Ra*, pp.224-225.
 (8) *Ra*, pp.231-234. Koster and Bial's Program for the week of April 20, 1896.
 (9) *The New York Times*, April 24, 1896. quoted in *Jr*, p.3-4.
 (10) *Ra*, pp.232-233. *Shg*, tome I, p.311. (サセ, 第2巻, p.127.)
 (11) *Mt*, pp.2-4, 94.
 (12) *Mt*, pp.5-6. *Rc*, p.190.
 (13) *Mt*, pp.6-8.
 (14) 大平和登著『アロードウェイの魅力』丸善, 1994年. pp.14-16, 261-262, 166-172.
 同『アロードウェイ2』作品社, 1985年. pp.314-319.
 (15) *Mt*, pp.9-10.

- (16) *Mt*, pp.10-11.
- (17) *Mt*, pp.11-12.
- (18) *Shg*, tome II, pp.318-319. サセ, 第2巻, pp.139-140.
- (19) *Dhc*, tome II, pp.275-277.
The New York Herald, June 28, 1896. cité dans *Dhc*. p.226.
- (20) *The New York Herald*, June 28, 1896. cité dans *Dhc*, tome II, p.226.
- (21) *Dhc*, tome II, p.276
- (22) *The New York Dramatic Mirror*, n° 914, 4 July, 1896. cité dans *Cl*, pp.110-111.
- (23) *The New York Dramatic Mirror*, n° 915, 11, July, 1896. cité dans *Cl*, p.111.
- (24) The Post-Express, 20 February 1897. cité dans *Cl*, p.111.
- (25) John M. BLUM et al., *The National Experience, A History of the United States since 1865*, New York, Harcourt Brace, 1973. Part II, pp.423-430.
モリソン著, 前掲. 第2巻, pp.509-513. *Shg*, tome I, pp. 133-134. (サセ, 第1巻, pp.177-179)
- (26) *Ra*, pp.79-82, 215-216. *Shg*, tome I, pp.155-158, 330-334. (サセ, 第1巻, pp.206-213, 第2巻, pp.159-162.) *Dhc*, tome II, pp.278-285.
- (27) *Mt*, p.11-12.
- (28) Edward P. CRAPOL, *America for Americans, Economic Nationalism and Anglophobia in the Late Nineteenth Century*, Westport, Greenwood Press, 1973. pp.5-6, 173-179.
フランク・ウィリアム・タウシグ著, 長谷田泰三, 安芸昇一訳『米関税史』弘文堂書房, 1938年(復刻, 有明書房, 1990年)。pp.11-12, 225-236, 253.
Shg, tome I, pp.335-336. (サセ, 第2巻, pp.162-163.)
- (29) BLUM et al., *op. cit.*, Part II, pp.481-488.
- (30) *Dhc*, tome II, pp.281-287. *Se*, pp.11-12.
Ra, pp.322-332. *DHC*, tome II, pp.281-286.
- (31) *The New York Dramatic Mirror*, 24 October 1896. quoted in *Se*, p.12.
- (32) BLUM et al., *op. cit.*, Part II, pp.487-489.
CRAPOL, *op. cit.*, pp.213-215.
モリソン著, 前掲. 第2巻, pp.564-565.
- (33) *Mt*, p.14.
- (34) タウシグ著, 前掲. pp.287-295, 318-320.
モリソン著, 前掲. 第2巻, pp.565-567.
Shg, tome II, pp. 21-24. (サセ, 第2巻, pp.27-31.)
- (35) *Mt*, pp.14-16.
- (36) *Mt*, pp.16-17.
- (37) *Mt*, p.17. *Rc*, pp.167-169. *Shg*, tome II, pp.23-25. (サセ, 第2巻, pp.30-32.)
- (35) *Mt*, pp.14-17.
- (36) *Mt*, p.17. *Rc*, pp.167-169. *Shg*, tome II, pp.23-25. (サセ, 第2巻, pp.30-32.)
- (37) *Mt*, p.17.
- (38) *Shg*, tome II, pp.25-29. (サセ, 第2巻, pp.32-37.) *Dhc*, pp.290-292.
アメリカ経済史等の史料をあまり多く引証してはいないが、『世界映画史』でサドゥールはシネマトグラフの受容と独占体の形成や大統領選挙との関係について深い洞察を示している。また、『比較映画史』の著者デランドおよびリチャールも、多数の記録が隠蔽されたことを嘆きつつ、この重要な問題が今後さらに解明されることを望んでいる。
- (39) *The New York Herald Tribune*, 24 February 1898. quoted in *Dhc*, pp.290-291.

(平成7年8月1日受理)